

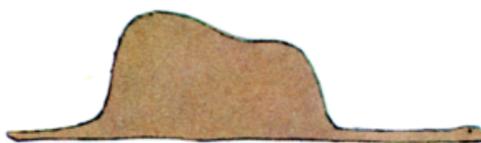
1

ぼくが6つのとき、よんだ本にすばらしい絵があった。『ぜんぶほんとのはなし』という名まえの、しぜんのままの森について書かれた本で、そこに、ボアという大きなヘビがケモノをまるのみしようとするところがえがかれていたんだ。だいたいこういう絵だった。



「ボアというヘビは、えものをかまわずにまるのみします。そのあとはじっとおやすみして、6か月かけて、おなかのなかでとかします。」と本には書かれていた。

そこでぼくは、ジャングルではこんなこともおこるんじゃないか、とわくわくして、いろいろかんがえてみた。それから色えんぴつで、じぶんなりの絵をはじめてかいてやった。さくひんばんごう1。それはこんなかんじ。



ぼくはこのけっさくをおとなのひとに見せて、こわいでしょ、ときいてまわった。

でもみんな、「どうして、ぼうしがこわいの？」っていうんだ。

この絵は、ぼうしなんかじゃなかった。ボアがゾウをおなかのなかでとかしている絵だった。だから、ぼくはボアのなかみをかいて、おとなのひとにもうまくわかるようにした。あのひとたちは、いつもはっきりしてないとだめなんだ。さくひんばんごう 2 はこんなかんじ。



おとなのひとは、ボアの絵なんてなかが見えても見えなくてもどうでもいい、とにかく、ちりやれきし、さんすうやこくごのべんきょうをきなさいと、ぼくにいつけた。というわけで、ぼくは6さいで絵かきになるゆめをあきらめた。さくひんばんごう 1 と 2 がだめだったから、めげてしまったんだ。おとなのひとはじぶんではまったくなんにもわからないから、子どもはくたびれてしまう。いつもいつもはっきりさせなきゃいけないくて。

それでぼくはしぶしぶべつのしごとにきめて、ひこうきのそうじゅうをおぼえた。せかいじゅうをちょっととびまわった。ちりをべんきょうして、ほんとやくに立った。ひとめで中国なのかアリゾナなのかがわかるから、夜なかにとんでまよっても、かなりたすかるってもんだ。

こうしてぼくは生きてきて、ちゃんとしたひとたちともおおぜいであつてきた。おとなのひとのなかでくらしてきた。ちかくでも見られた。でもそれでなにかいいことがわかったわけでもなかった。

すこしかしこそうなひとを見つけると、ぼくはいつも、とっておきのさくひんばんごう 1 を見せてみることにしていた。ほんとうのことがわかるひ

となのか知りたかったから。でもかえってくるのは、きまって「ぼうしだね。」って。そういうひとには、ボアのこと、しぜんの森のこと、星のこともしゃべらない。むこうに合わせて、ブリッジ遊びやゴルフ、せいじやネクタイのことをしゃべる。するとおとなのひとは、ものごとがはっきりわかっているひととおちかづきになれて、とてもうれしそうだった。



2

それまで、ぼくはずっとひとりぼっちだった。だれともうちとけられないまま、6年まえ、ちょっとおかしくなって、サハラさぼくに下りた。ぼくのエンジンのなかで、なにかがこわれていた。ぼくには、みてくれるひともおきやくさんもいなかったから、なおすのはむずかしいけど、ぜんぶひとりでなんとかやってみることにした。それでぼくのいのちがきまってしまおう。のみ水は、たった7日ぶんしかなかった。

1日めの夜、ぼくはすなの上でねむった。ひとのすむところは、はるかなただった。海のどまんなか、いかだでさまよっているひとよりも、もっとひとりぼっち。だから、ぼくがびっくりしたのも、みんなわかってくれるとおもう。じつは、あさ日がのぼるころ、ぼくは、ふしぎなかわいいこえでおこされたんだ。

「ごめんください……ヒツジの絵をかいて！」

「えっ？」

「ぼくにヒツジの絵をかいて……」

かみなりにうたれたみたいに、ぼくはとびおきた。目をごしごしこすっ

て、ぱっちりあけた。すると、へんてこりんなおとこの子がひとり、おもいつめたようすで、ぼくのことをじっと見ていた。あとになって、この子のすがたを、わりとうまく絵にかいてみた。でもきっとぼくの絵は、ほんもののみりよくにはかなわない。ぼくがわるいんじゃない。六さいのとき、おとなのせいで絵かきのゆめをあきらめちゃったから、それからずっと絵にふれたことがないんだ。なかの见えないボアの絵と、なかの見えるボアの絵があるだけ。



〈あとになって、この子のすがたを、わりとうまく絵にかいてみた。〉

それはともかく、いきなりひとが出てきて、ぼくは目をまるくした。なにせひとのすむところのはるかかなたにいたんだから。でも、おとこの子はみちをさがしているようには見えなかった。へとへとにも、はらぺこにも、のどがからからにも、びくびくしているようにも見えなかった。ひとのすむところのはるかかなた、さばくのどまんなかで、まい子になっている、そんなかんじはどこにもなかった。

やっとのことで、ぼくはその子にこえをかけた。

「えっと.....ここでなにをしてるの？」

すると、その子はちゃんとつたえようと、ゆっくりとくりかえした。

「ごめんください.....ヒツジの絵をかいて.....」

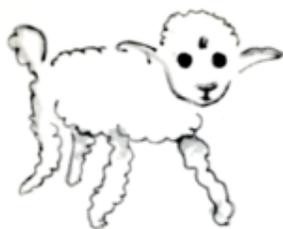
ものすごくふしぎなのに、だからやってしまうことである。それでなんだかよくわからないけど、ひとのすむところのはるかかなたで死ぬかもしれないのに、ぼくはポケットから1まいのかみとペンをとりだした。でもそういえば、ぼくはちりやれきし、さんすうやこくごぐらいしかならっていないわけなので、ぼくはそのおとこの子に（ちょっとしょんぼりしながら）絵どころがないんだ、というと、その子はこうこたえた。

「だいじょうぶ。ぼくにヒツジの絵をかいて。」

ヒツジをかいたことがなかったから、やっぱり、ぼくのかけるふたつの絵のうち、ひとつをその子にかいてみせた。なかの见えないボアだった。そのあと、おとこの子のことばをきいて、ぼくはほんとうにびっくりした。

「ちがうよ！ボアのなかのゾウなんてほしくない。ボアはとってもあぶないし、ゾウなんてでっかくてじゃまだよ。ぼくんち、すごくちいさいんだ。ヒツジがいい。ぼくにヒツジをかいて。」

なので、ぼくはかいた。



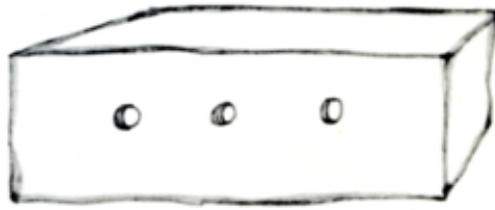
それで、その子は絵をじっとみつめた。
「ちがう！これもう、びょうきじゃないの。もういっかい。」
ぼくはかいてみた。



ぼうやは、しょうがないなあというふうにわらった。
「見てよ……これ、ヒツジじゃない。オヒツジだ。ツノがあるもん……」
ぼくはまた絵をかきなおした。



だけど、まえのとおなじで、だめだといわれた。
「これ、よぼよぼだよ。ほしいのは長生きするヒツジ。」
もうがまんでできなかった。はやくエンジンをばらばらにしていきたくっ
たから、さっところこういう絵をかいた。



ぼくは行ってやった。

「ハコ、ね。きみのほしいヒツジはこのなか。」

ところがなんと、この絵を見て、ぼくのちいさなしんさいくんは目をきらきらさせたんだ。

「そう、ぼくはこういうのがほしかったんだ！このヒツジ、草いっぱいいるかなあ？」

「なんで？」

「だって、ぼくんち、すごくちいさいんだもん……」

「きっとへいきだよ。あげたのは、すごくちいさなヒツジだから。」

その子は、かおを絵にちかづけた。

「そんなにちいさくないよ……あ！ねむっちゃった……」

ぼくがあのとときの王子くんとであったのは、こういうわけなんだ。



3



その子がどこから来たのか、なかなかわからなかった。まさに気ままな王子くん、たくさんものをきいてくるわりには、こっちのことにはちっとも耳をかさない。たまたま口からでたことばから、ちょっとずつ見えてきたんだ。たとえば、ぼくのひこうきをはじめて目にしたとき（ちなみにぼくのひこうきの絵はかかない、ややこしすぎるから）、その子はこうきいてきた。

「このおきもの、なに？」

「これはおきものじゃない。とぶんだ。ひこうきだよ。ぼくのひこうき。」

ぼくはとぶ、これがいえて、かなりとくいげだった。すると、その子は大きなこえでいった。

「へえ！ きみ、空からおっこちたんだ！」

「うん。」と、ぼくはばつがわるそうにいった。

「ぷっ！ へんなの……！」

この気まま王子があまりにからからとわらうので、ぼくはほんとにむかついた。ひどい目にあつたんだから、ちゃんとしたあつかいをされたかった。それから、その子はこうつぶけた。

「なあんだ、きみも空から来たんだ！どの星にいるの？」

ふと、その子のひみつにふれたような気がして、ぼくはとっさにききかえした。

「それって、きみはどこかべつの星から来たってこと？」

でも、その子はこたえなかった。ぼくのひこうきを見ながら、そっとくびをふった。

「うーん、これだと、あんまりとおくからは来てないか……」

その子はしばらくひとりで、あれこれとぼんやりかんがえていた。そのあとポケットからぼくのヒツジをとりだして、そのたからものをくいいるようにじっと見つめた。

みんなわかってくれるとおもうけど、その子がちょっとにおわせた〈べつの星〉のことが、ぼくはすごく気になった。もっとくわしく知ろうとおもった。

「ぼうやはどこから来たの？〈ぼくんち〉ってどこ？ヒツジをどこにもっていくの？」

その子はこたえにつまって、ぼくにこういうことをいった。

「よかった、きみがハコをくれて。よる、おうちがわりになるよね。」

「そうだね。かわいがるんなら、ひるま、つないでおくためのロープをあげるよ。それと、ながいぼうも。」

でもこのおせっかいは、王子くんのお気にめさなかったみたいだ。

「つなぐ？そんなの、へんなかんがえ！」

「でもつないでおかないと、どこかに行っちゃって、なくしちゃうよ。」

このぼうやは、またからからとわらいだした。

「でも、どこへ行くっていうの！」

「どこへでも。まっすぐまえとか……」

すると、こんどはこの王子くん、おもいつめたようすで、こうおっしゃる。

「だいじょうぶ、ものすごおくちいさいから、ぼくんち。」

それから、ちょっとさみしそうに、こういいそえた。

「まっすぐまえにすすんでも、あんまりとおくへは行けない……」

2024-12-22

Minor changes were made

https://www.aozora.gr.jp/cards/001265/files/46817_24670.html